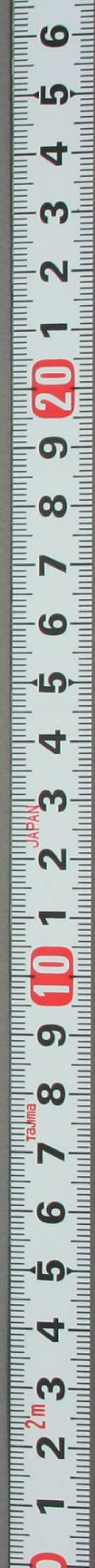




林氏雜纂

上

2
465
1





465
1

許官

多氣志樓主人著

林氏雜纂

全二冊

東京

甘泉堂
千鍾房
合刻



林氏雜纂叙

陸前國林子平先天以後憲有外
患著海國兵談當時海晏河靖
朝野恬熙不以分患為意賢閣老
如白河少將猶以為妄言証世者况
使吏庸人聞其說未有不掩身而却

林氏雜纂

走者子平沒未幾有鄂羅斯之
愛其所言此龜卜數計天下始非
其識見之明豈可不謂豪傑之
士哉東京松浦子重夙慕其為
人百學其遺言遂行成二書名曰林
氏雜纂邦寄徵事序夫兵法之要

在於知己知彼惟知己而不知彼則身
目圍於一隅懵昧固陋胡足以立天下
之大計子平有見於此北極俄夷西
耳列長崎以通憲法外之情狀為
先務然在子平之時諸港尚鎖故
其論以防戢為之主今則子平以為可

實可憂者莫如暹羅巴諸國 我其
之通和親睦條約仿造其器械則
有銃礮有鐵道有火輪船有傳信
檄講究其學則有開成學延洋師
遣留學生汝亦之事情日明而天以
之目目日閱彼使乎平而有知視以

寫河如夫和之破必歸戰之極
必歸和之之其戰未始不相由也至
國之才可戰而後和之久而不渝不能
則名和而實屬隸其勢必至於陵
侮之稍制之沒削攘奪之而和
亦遂不可保也然則兵備之不可不

張惡有和典我之別哉嗟予予當
天少身目未開之際猶能先衆禱無
備字粒可觀則俾其出於今日耶吾
必知周流五洲歷察各國戎政之
得失通而變通之泰互而酌量
之為

皇國之萬世適宜之法其揣摩
精確更有不倍於兵談者焉而墓
木既拱矣無由起之九原逞其伎倆
余竊為天下痛惜之多承五登榮知
縣系於陸前國之先哲有子平其
人表章其事迹以獎厲後進因吾

職也而兵亂之解仍以飢饉初務
鞅掌未暇及幸有子重是蒙故不
辭以多事援筆數卷首云

明治庚午仲秋就鸞津宣光撰前書于
登米縣安遇齋

神井耳
命苗裔

縣連
宣光

庚戌
全尔

松浦子重者歐州飯
粳遠近名其地亦大
丁嗜此之積至二百餘
卷得心於此業益三
十年矣其書

五石之新之運者惟
夷闕拓之舉則子金
三九年之借心大司
為國家之用人皆成
子重之篤志且海見

之字存之在自如
子平之為人後之
訪其世族之揚名
赤親善故借子平
讀漢書林氏雜纂序

有定之以謂慷慨有定之
士惟於不若而子亦而如
子宜自極隨海客依
之地以何國家有困之
業其深而平也德其子

平同之志真身之子亦之
志已如之何之而重回其
志者亦若子平之知也也
平此之志也其志也
益多之志也其見多也

四法三之歲庚午菊
秋山中賦撰每書於
東家之信天行腐



東久世開拓長官詠

首遊之秋青瑤如夢
也之在東安於之之六
之千之まじしあけ靴
君之まじしあけ靴
通社福

[Faint, illegible ghosting of text from the reverse side of the page]

贈亘理往齋集書翰之寫

親も為、あるの、
あ、板、ある、
そ、れ、と、
あ、り、
井、子、家

海之揚波二百年無人
開口到防邊一德熟
血虫埋却唯五水東
石種老泉水今防海

快狗至竟精果等
神果后如成切受
童孫只言繡新人

竹溪齋題



漫遊中所齋雅帖所有寫

海玉岳波のうきも
 舟の人もよせは
 さみしきも
 世のあそび
 林道良阿
 雅書

子氏林先生肖像

北海道
八家



標齋氏一縮寫

林氏雜纂序

林良伍来翰

前文

先生之在疾、此境、お氣にかんや知らねども
 以約者、りる言さるを上は、長治正助家にて、
 肖像之、幽ハ子平の姪、る子、お、よく似て、人
 と、中、承、在、十六七、才、ま、お、床、事、して、始終
 有、と、依、え、ま、い、と、有、る、お、と、な、る、お、素、原
 何、某、と、お、老、醫、八、十、五、餘、え、其、容、白、と、知、と、少
 お、り、見、ま、い、知、少、一、類、瘦、う、り、と、云、一、お、此、圖、ハ、少
 肉、と、加、一、字、一、中、ハ、下、畧
 良伍

雲津様

林氏雜纂卷之上

松浦武四郎 編

海國兵談の後了

傳へては我が本は、はをよの法、はをよけ、する、年、の後
 父兄訓れ、傳ふ

學子則

鬼神を和と、ま、い、の、心、志、と、い、親、子、は、是、れ、志、を、り、ら、る、れ
 一、孝、悌、忠、信、勇、義、廉、恥、ハ、字、能、心、よ、記、一、
 孝ハ、親、リ、侍、る、道、也、リ

親に對して不敬不作法は之を棄てて不敬不作法は孔の可業
 多く其身此行作正直にして親の心を安堵せしむる事なり
 一悌は兄弟の義に兼て父を尊ぶ道にして且長者に順ふる事なり
 兄弟の不及已より年を増すたる人其兄弟に不敬して能く不
 敬を順ふる行位坐臥飲食亦も之を孔の遺を不忘して順
 道を守り奉る事之又年減する人と弟同様に之を奉る事なり
 一忠は君に侍る事にして且朋友に交る事偽る事信義を
 以てする事なり
 己を盡すは忠といふ君に事して死する事己を盡すは
 朋友に位ある事己を盡すは朋友に事して死する事己を盡すは

為小死すといふなり 忠なり
 一信は毎事に於て言を信ずる事なり 實事以て信ずる事なり
 上天子より下席人まで信あり人信しは人
 肖く貴賤を以て信あり人信しは人肖く
 一勇は義に相争ふ事なり 勝る事なり
 文武は諸藝の心術心法も勝る事にあらずこれの上達成就
 遅き之勝る事ハ万能の上事なりと知る事なり
 一義は勇に相争ふ事なり 裁断に心なり
 道理不仁を以て決断して之を殺す事なり 死を以て
 場を以て死し討つ事場を以て討つ事なり

一 塵をかき有るは清くもたす濁るる事

毎物にたたく奇意ふしとむき好意に捨つて成見て
そと取す一とを不取之恥におおなり

一 耻を辱を知るも前勝の恥致さる事たる也

毎事より無事練るる所業成れば一人の業はま
穠りと眩病るる所業あやて他日ふけまればおと
心然にまか事之塵におおなり

右八徳の人は土産なり

一 讀書怠る事るれ

讀書の萬能に基るなり

卯の時起て高聲にも讀書す也

辰の時より巳の時まで一字を習ふなり

晝の間は下小記とてく或を習ふなり又農工商の卯の時

より其指前此業致致す一徳の遊歴と習ふ事と禁を

夜の法軍讀及ひ法記読ふ事禁は随ひ或は三五枚或

十枚或十枚乃至百枚に讀つ事也

一 武蔵の精出するなり

巳の時より酉の時まで産道と習ふなり就中刀槍弓馬紙

先とて保學問七業武蔵十の業の心強るなり

一 良智能認記して心學を廣くなり

人々善悪邪正の附く可否如何と顧れは善は善と悪は悪と
 明子辨之知心あるは是良智之此良智ハ不學して天然
 百人の胸中に存在する者ありて所謂神明之萬事此
 良智に向て取計ハ一此良智れまにまらるる克己復
 礼此修行を強て勤ハ一克己ハ勇之顔子は是故仕
 終せらるる其次ハ是と勤むハ一
 一克己復礼此二言能辨ハ勤むハ一
 克己ハ己ハ勝と之事己ハ人徳此私とて己ハ勝と
 一と皆己より此己ハ抑降する克己然也
 復礼ハ徳に勝て道と義に叶ふ様子を事之事物皆

礼不礼有て顧ハ一或ハ妄ハ怒事費する時と何故か斯
 怒事至る也と顧ハえより私此我位より起る夜るれば
 一度顧て息消去する之最急等の事大ハ勇と用ハ前
 一榮此湯搖樂此ハ當朝此大礼之然るハ隱者乃敬ハ
 事教儀の音るハ一祿ハ一園ハ不心持ハ大ハ免悟ハ一
 附閑暇此時詩文或ハ琴ハ棋ハ畫ハ此雜藝を習て
 空ハ一日と送るハ一

右ハ徳讀書武藝良智克己復礼榮の湯搖樂ハ八條
 ハ皆身道事集たり今日此業ハ修るハ遠大の事に
 あハ此業ハ是故勤るハ馬ハ寸陰と惜ハ云ハ寸陰ハ

一寸此隙と云事之又古人業を勤むる君子は隙一寅に
 起ると云ハ一月の日教二十日とい學の是なる故一月は
 四十五日より刻念之是勇此持前之聖人の心法も傳
 氏も神家の武藝者の事位も勇にあはるは八行の邊
 凡ぬ之者て心法は勇故也と進む事教を勤む
 文武之二業は皆此心法と云事之是學業の大趣也

附録三章

- 一物を教へ志を失ふ
- 己の志を好む事の一途小之流極む必也
- 一金教の經濟は人の能く知る

大小此福小盡して家道成約の他の力故不極して
 朝言と暮言一蓄積と云事

一飲食男女人の大慾た不可不慎也

凡人を婦女は大丈夫の度を失て身を損一或は
 義理を欠恥辱を取不和を生一等して終に國家
 破るも亦人の能く謹慎む

右

教刑いろは歌

いとける妻人もとくやあいらは教五川の常此道志く人そと
 ろるるよと事と云事た心と云事年た増る人を教へ

はふんきん志川よ長く腹下まきゆくの文武此書位乃本
 にんおおのり此上はしきよをれう阿 三書抄記
 けのく乃礼義長るれ朝夕に心やまうと悟る中
 つまこころく人成うやまふ節うと多已成さたにすは礼
 ぶあまに人のあまとい川りく子礼語をれいり信福
 ち母乃思は順山和国は海言を海言のかきりあけれ
 利性く羨山い此沙法成取のそり理の自然と明くせよ
 ゆきんて我志うるにまのり礼人此智恵うる上ようあり
 るい成をるれ志せいのゆを好きよ何う降ぬ男持り記
 をのれよく山法友よまれよく乃何美わのあ 三記り

わされ此果口論言毎事り教れくもけやと書えす記
 かりくは五つの五れまうのり能と記きくそ親まうのよ
 よふ書いま川一此書其次にカク一移より馬く一終
 たりるゆよとく一八身妙にの形一八負より其の事八何れ
 礼い美えその種一此多別りり是くぬに礼るは信い志也
 るたりうの能記に其方此をれく親也祖父の存何くは
 ついともあまに八胸あまうま此種よ出るり下くこの書
 ねん力は定ると通王習いなり一書年ゆるむ心たるれ
 たり中事よこの書い其の精出せ月只るれとふりまう
 らく成好くよ書此書い其ぬ人八君一此名也親の名考と

むつしや腹れま付のりよま理のねく六種處所の中のみ
 うつしやまさん人此本をよくらたはれりるる事ありま
 るるうしよふ原也大和のあなをまきう神よみ作作は
 のちまを原まふあ也まきう改改よ也れに忘れ多り出る
 たり也なり也の種を管いよの事れとらうは智と義理の用場
 くるうより清業精業をなすはまのうしよ此業よはら麻
 やすうに物をあつらうるも物無理座の座 貴を業つれ
 まことたふ教日向まうつせれたはけ何うしよ大地の神
 けやうしよあまをうしよつて是れをきりうしよ我悔を悔と
 されよるれをきりぬ人たうしよらは人上胸は書生

う後とはいりころすれはは海家なるん可也のふ
 じんをまけくうよまのひるすれよ一度は過言しうけ
 てんうしよ是放心れまうしよなりうしよれはこれ編を
 あしよはは也くたまうしよとら 貴おを子就古事ま
 所のまうしようしよるま先まをれまうしよ福をうしよ
 めふいこてんれはれ鼻をかきうしよのふ様まをま
 みまらまはた也子あの子就をふらうしよ先上位約をま
 しよまやうはうしよ讀て事れ能ま知へしよ迷ま
 及よのうしよあ人若くしよまうしよん我り本よ 本よ 外れ
 ひとらうしよのまひはうしよに念まうしよとあまあま
 小田の役ま

もろくは此のよまき口能本の記録くんとん終るん
せひ後より赤くくくくくくく切られたる人く拙る
すきよのく海くくくくくくくくくくくくくくくく
右様くくくくくくくくくくくくくくくく

和蘭船ノ圖ノ上ニ刻スル文

阿蘭陀一名ハ和蘭又紅毛ト稱ス則業謁埤爾蘭德亞
ノ中ノ一州ノソレ子エテルランデヤハ世界ノ西北邊歐羅巴分
野ノ國ノ其地七州十七都會アリ。フランダモ其中ノ一州ノ本邦
モ惣名ハ日本ニテ其中ニ四國九州杯ト分ルカ如シ。フランダハ北極
ノ出地五十度ヨリ五十三度ニ至ル甚寒地ノ其人物ニ五ツノ異

相アリ長鼻緑眼紅毛白色長高也文字ヲ。レツテルト云其
筆法横ニ書ス日本唐山等ノ人ニ不讀。其服ハブルツクトテ日
本ノ股引ノ如キ物ヲ着シ夜ハ。ロツコトテ襦半ノ如キ物ヲ服ス
官アル者ハ。マントルトテ丸合羽ノ如キ物ヲ礼服トス其食物ハ。
ブロードトテ小麦ノ粉ヲ餅ニ造テ炙食フ世ニパント云モノ是之
其外鳥獸膏粱ノ物ヲ好。又生蘿蔔ヲ多食ス其國日本ヲ去
一日本道一萬三千里ノ其中日本ヨリ呱哇へ三千里呱哇
ヨリ。フランダエ一萬三千里ノ扱毎年日本エ来ル。フランダ人ハ
本國ヨリ来ルニハ非ス皆呱哇ヨリ来レリ呱哇ハ。フランダヨリ
押領シタル國ニテ出張ノ城アル所ヲ。バターヒヤト云日本ノ紅毛

林印録卷之二
館ヲ出島ト云カ如シ吼哇ハ日本ノ正南ニ當レリ此故ニ五月
入^ツ徽ノ節南風ヲ得テ日本へ来船シ九月北風ヲ待テ舩帆ス
是ヲ定式トス扱ヲラシタ人舩ヲ呼テシキツフト云其舩ノ制
甚壯大ニマツ大材ヲ用テ舩ノ骨組ヲ作り栗ノ角材ヲ以テ
縦横ニ打合セ空隙ノ処ハ漆或ハキヤシラ込又外面水ニ入ル
ハ悉ク鉛ヲ以テ包ム舩ノ大サ横三丈余長十五丈深サ三丈
八尺舩ノ内ハ惣三階ニ階毎ニ九尺帆柱都テ四本アリ中央
ノ大柱高キ一十九丈ニ都テ帆ノ數十七幟ノ數十二四面ニ
大砲三十余ロヲ設ク砲毎ニ三貫目ノ玉ヲ入ベシ扱其舩ニ
乗来ル人凡百余人ニ其中甲比丹^{カヒタン}ヘトルシケツフルフヲ

フマンステユルマン等ト云ハ役名ニテ上役ヲラシダ人ニ其
余ノ下人ヲマタロスト云甚賤キ風俗ニ又下人ノ中一種ス
ワトルヨンコト云モノアリ世ニ黒ホウト云モノ是ニ是ハ本
國ノ人ニハ非ズジヤカタラブウキスボウトンテーモル等
云南海ノ島ミノ下人ヲヲラシダ人買取テ名々ノ使ヒ者ト
スルニ皆熱國ナル故其人甚黒色ニ又舩毎ニ名アリ或ハ
ゼートイン或ハスタアベニス或ハホイストスヘーキ等ト云
日本ニテ何丸ト名ツクルカ如シ扱其舩ニ載来ルモノハ砂糖
蘇木藤羅紗^{スハウ}天^{トウ}我^カ織^シ奥^{オウ}嶋^ト海^{カイ}氣^キノ類木香阿仙藥丁子
山飯来胡椒又硝子器目鏡其外珍器奇鳥獸ニ又其食

料ニ牛豕雞鶩ノ類各數百千ヲ載ス亦日本ヨリ積取ル物銅
百万斤ヲ定式トシテ其外傘磁器漆器銅罐銅錢小間物類
織物類又食物ニ境酒芥子粕漬ノ大根諸菓ノ漬物又
各數百千ヲ積シ其船凡千万斤ヲ受其國開闢ヨリ今年
迄五千四百二年ニナル阿蘭陀ト云号ヲ立レ國主ヨリ今年迄
千七百七十六年ノ國主紘脉變革ナレ寬永十七年商賣
免許アリシヨリ今年迄百四十三年綿ニ不絶緝也天明
二年記

此圖崎陽ヲ一見一聞ノマ、ヲ其地ニテ刻セシモノカ傍ニ
仙拾林子平戲述書長崎富嶋傳吉梓刻ノ篆字朱

印有ルナリ

跋六無山人著書後

鎖國之計似美。而其弊終至自鎖我人。鎖我學。又
併我才。與知而鎖之。是可歎已。試把百年前說海
外事情者。觀之不涉於荒唐。則必失於乖繆。特達
若林子平。猶且不免其陋也。然子平居河清海安
之日。豫虞險波毒浪於身後。喋喋辨說。著書萬言。
至使開明今日之憂國者。不得不推尊其卓見。曠
識。所謂隻眼如箕者。非耶。兒身留學于法蘭西。今
茲夏五。寄彼國新刊書數部於其友川勝大海。內

有王代一覽三國通覽圖說二書顧彼學士羅尼
輩所譯也嗚呼彼亦知所原哉庚午仲秋鮑庵逸
民粟本鯤識

坪碑考

坪或作壺俗作壺者誤也○坪蒲明切音平地平處
○壺苦本切音悃宮中衙亦爾雅宮中衙郭璞曰衙
閣間道也亦詩大雅其類維何室家之壺

○此碑也在陸奧州宮城郡多賀城址陸奧國宮城
郡風土記云坪碑在鴻之池為故鎮守府門碑惠美

朝獨立之見雲真人清書也記異域本邦之行程令
旅人不為迷途也

○此碑作坪碑亦作壺碑共是可謂道路之碑之義
也雖然稱壺碑者不知始于何人也唯因風土記為
坪碑者可為是也而因為鎮府門碑之文則建于碑
於城門外面大道令人知四方之行程者也

○此碑記五方之行程謂去蝦夷國界一百廿里也
右謂一百廿里者准于今法廿里六尺為步六十步

丁為一里今乃以三丁為一里也故則知挑生
謂古之一百廿里者乃准于今之廿里也
郡以北盡没于夷地也其挑生郡者在陸奧州中央

以南之地也考之國史往昔夷人侵凌陸奧北邊而
動乃入寇奧南野總之諸州也故東征之役無已者
千有余年矣而桓武帝延曆中征東將軍坂上大宿
禰田村麿驅夷人而悉收陸奧開地者九百里自挑生郡
至于南部大間濱其行程乃今法之一百七十余里乃古之九百里也因海為塞則陸
奧無征戍之事者六百余年也可謂實是征東將軍
之大功也其後

後花園帝嘉吉三年武田太郎源信廣越海而入于
松前遂得地者七百里自大間濱隔一條汐水而以
南界東北行今法之一百里計乃古之六百里也是乃今之蝦夷國界也自是子孫世世

據守其地迄于今也松前地方雖絕海乎猶隸陸奧
也因是觀之方今宮城郡鎮府古城者去蝦夷國界
為一千六百廿里也田村磨之所開九百里源信廣
廿里則為一千六百廿里也今世讀碑者因其碑文而不知有蝦
夷國界之道法古今近遠之差也故此記爾觀者詳
焉仙臺林子平述

攷坪碑在陸奧州之多賀城相傳惠美朝獨立之
迄今年已千計揆立碑之意不過使四方行程者
適所從來余本華人安能詳述今仙臺林子持碑
見示觀其筆法道勁專倣古人而若論其精粗則

吾豈敢雖然絕海東方唯見有此書耳且至於道里之遠近山川之志異恐非余所能參稽者是為跋

大清乾隆四十三年歲次戊戌重陽後三日書於崎陽客館吳超後學程赤城

林氏雜纂卷之上

